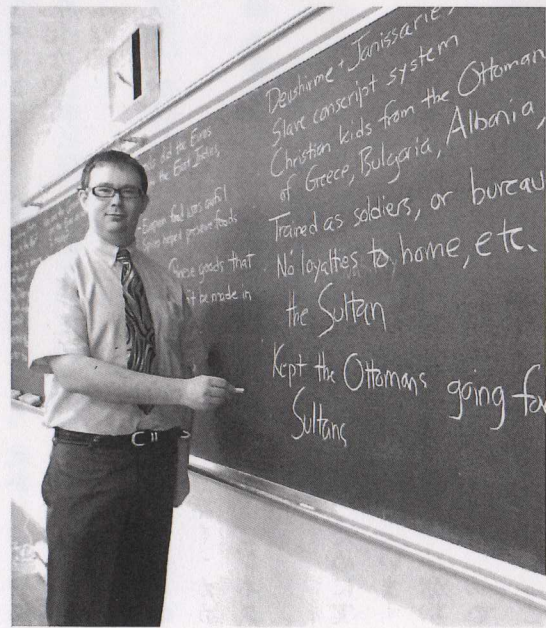


第三章 「真の国際人」とは



地球の中の日本

この半世紀のあいだ、地球はどんどん小さくなっていきました。

航空機などの移動手段の発達に加え、テレビや電話をはじめとする通信技術の進歩、そしてインターネットの普及による地球規模の情報の共有化なども、物理的、精神的な距離をどんどん縮めていき、同時に、人々は国境を越えて活動や営みの範囲を広げていきました。

学園にはよく、入学や編入を希望するご父兄の方々が見学に足を運ばれます。先日は、息子さんの編入先として学園の小学校に興味を持っていただいたというご家族が見えました。お話をうかがうと、現在お住まいはカナダのバンクーバーにあり、お父様はカナダと日本を行き来するビジネスマンで、お母様は東京の八丁堀でカルチャースクールの経営なさっているといいます。

そんなふう身近な生活空間が地球規模におよんでいるというお話に接すると、留学のために実に三十一日をかけて海を渡った五十年前とのあいだの遠い時間の隔たりに思いを馳せてしまいます。私は、この世代の人間としては比較的、若いころから、日本の外の空気によく触れてきた方かもしれません。そもそもキリスト教という、もともとは西洋で生まれた価値観や考え方の中で育ってきましたし、二十代のうちにヨーロッパ諸国や北米などを訪れ、そこで単なる旅行者では触れるこ

とのできない、外国の人々の考え方や人間性と向き合う機会を与えられました。

洋行の船のレストランでは、まわりからじろじろと物めずらしげな視線を向けられ、自分はいったん日本を出れば白人でも黒人でもない、小柄で肌の黄色い、小さな島国の人種であるという思いを、料理の味の代わりにかみしめました。

留学先のフリブル大学では、早々にアメリカ人と議論も交わしました。

「おまえたち日本人は、真珠湾を不意打ちしたよな。」

「あんたたちこそ、原子爆弾を落として、たくさんの人たちの命をうばっただろう。」

などと、かなりお互いに熱くなってやり合っても、彼らは翌日には

「おはよう、ドミニク（私の洗礼名）。元気かい？」

と肩をたたいてきます。日本人どうしなら、しばらくお互いに感情が尾を引きそうなものですが、アメリカ人はさっぱりしたものだ、世界にはいろいろな人々がいると感心したものでした。

「真の国際人」とは何か

今日、教育をめぐるいろいろな場所で、「国際化教育」がテーマとして掲げられています。

「国際人」という言葉は決して新しいものではありませんが、何をもって国際人とするのか、国際

